二〇二二年一二月二日

炭俵風除けに積む杣の軒　みきお
大根の干されて仁王立つ大樹　あひる
コロナ禍の電車遠慮の咳ひとつ　ひのと
父息子言葉交はさず海鼠噛む　みきお
果ててなほ仄と温もり焚火跡　たか子
大根の透けて煮上がる夕厨　澄子
江戸前の染工房や冬の川　千鶴
二〇二二年一二月一日

漆黒の海に打ち上ぐ冬花火　なつき
両の手で悴む児の手包みけり　なつき
神木の根方へ返す落葉掻　うつぎ
着膨れに更に一枚割烹着　明日香
二〇二二年一二月三〇日

菜園の今年一番冬大根　ひのと
実習船より手を振れる冬帽子　満天
葉葉して空つつぬけの大銀杏　ひのと
叱るとき男言葉や頬被り　あひる
冬ぼうし褒められて出る面会室　ひのと
二〇二二年一二月二九日

花びらのやうに足袋干す石の上　なつき
困や頬赤き子が鬼の役　ひのと
漫画読む子がはみ出せる炬燵かな　せいじ
ケアバスに乗る母の背に銀杏散る　あひる
老い母に添ひて傘さす冬の雨　素秀
二〇二二年一一月二八日

棟上の御幣のうへに冬銀河　むべ
売り文句華語や日語や市小春　澄子
方丈の明け放たれし小春かな　満天
木の葉髪まさか身長縮むとは　ひのと
後ろ手に閉める障子や通夜の席　紺碧の空展けたる木守柿
薪割りの音冴え渡る一山家　うつぎ
二〇二二年一一月二七日

観音像後光さすごと寒夕焼　かえる
枯菊の刈られし後の日の匂ひ　智恵子
なるがままとて心決め落葉踏む　うつぎ
一羽来て一羽飛立つ木守柿　たか子
丸々と畝に肩だす小蕪かな　こすもす
辣韮の花野の先に水平線　豊実
二〇二二年一一月二六日

名を呼べば子らが這ひ出る炬燵かな　素秀
雑炊の匙は栗の木荒削り　ひのと
流木に潮騒を聞く浜小春　せいじ
足湯いま女四代湯治旅　澄子
立話尽きぬ二人に銀杏散る　あひる
本州の山並みはるか島小春　せいじ
ブルーインパルスの過ぎる枯野道　なつき
セピアなるり庭華やぐや実千両　董雨
冬迎ふ花柄の杖伴侶とし　たか子
冬うらら螺髪に挟むお賽銭　やよい

毎日句会みのる選・二〇二二年一二月二六日